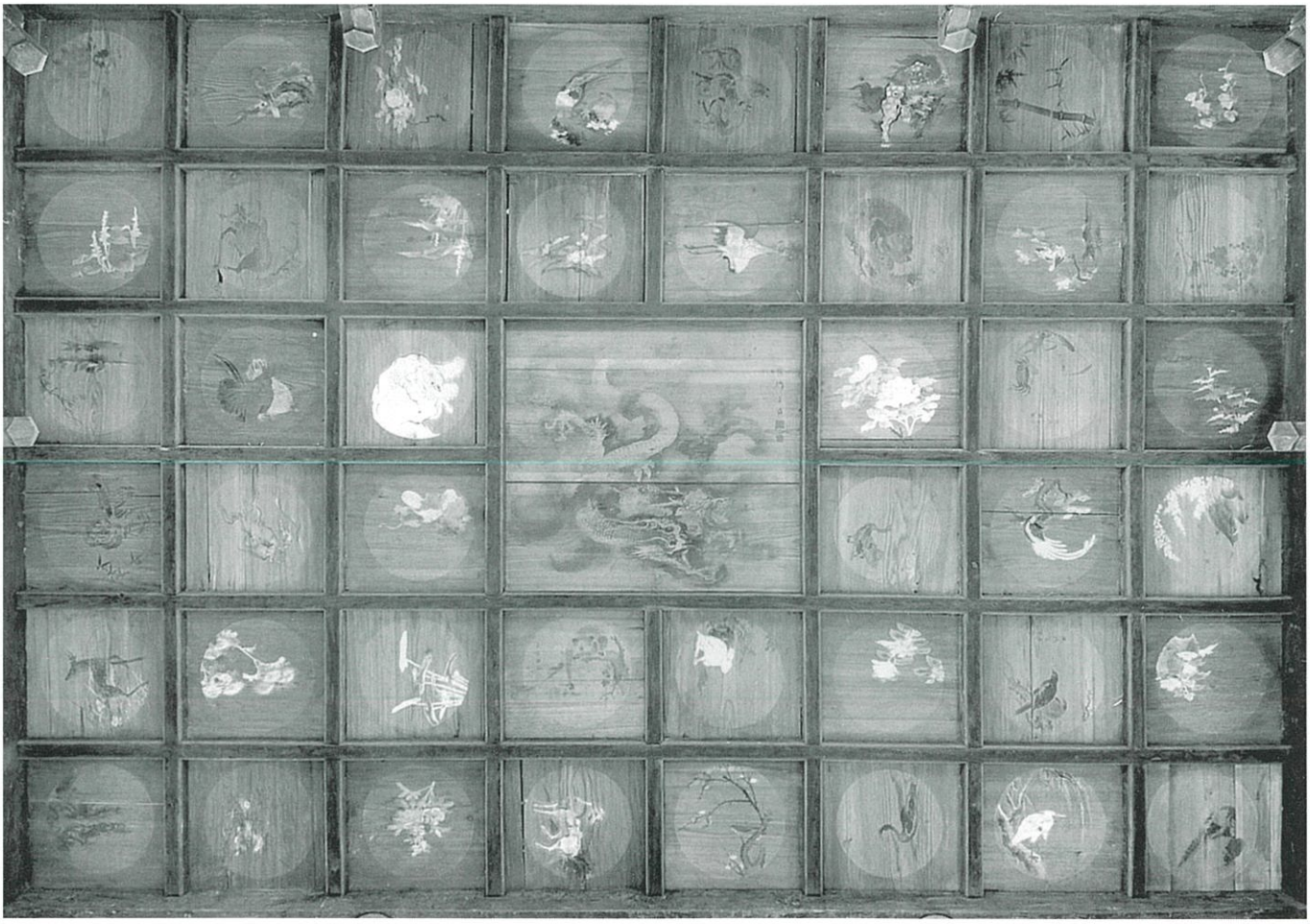
かも市史だより

平成24年3月
No.25

◆編集発行　加茂市幸町2丁目3番5号　加茂市教育委員会内市史編さん室　☎0256(52)0080 内線480

■ 上土倉・十二神社拝殿の格天井画 ■



十二神社の拝殿天井には中央に大きな龍、その周りに花鳥・動物など四四面、合計四五面の絵が描かれています。

中央の龍の絵に「越海芳明」の落款（サイン）と「越海芳明」「子元氏」の方形印が押されています。芳明は名で、子元は字（あざな）と思われます。龍を囲む四四面のうち、落款・印章により芳明作と明らかなものは四面ですが、絵筆の運びや画調などから、すべて芳明が一人で描いたものと考えられます。

芳明は新潟出身の文人画家・五十嵐浚明（一七〇〇～八一）の弟子とか、今町（見附市）の画家小泉其明（一七六一～一八三六）の師にあたるなどの説がありますが、詳しくはわかりません。

新潟市歴史博物館に芳明の作品が所蔵されています。五十嵐浚明の絵を手本にした享和二年（一八〇二）の「臨画図巻」です。十二神社の牛図や虎図は浚明の作品に似ており、落款の「明」の字体もやはり浚明の落款によく似て、彼がその系統を引く画家であると思われます。この天井画は、謎の絵師・芳明の代表作とみなせる力作です。

（近現代部会　長谷川昭一）

特集 図書館と坪谷善四郎

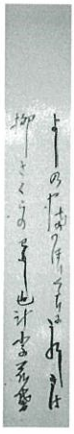
狭口村の出身で東京へ出て成功した実業家・坪谷善四郎（一八六二～一九四九）は、加茂町立図書館へ日記や著名人の書簡など多くの私財を寄贈しました。その一部を紹介します。

「今世名家短冊帖」

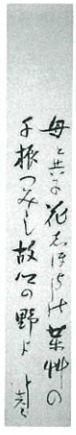
加茂町立図書館は、戦前の大手出版社・博文館に勤めた坪谷善四郎が「青少年のために、郷里加茂にも図書館を」と願い、明治三十九年（一九〇六）以来数千冊の図書を加茂町に贈って設立されました。昭和十五年（一九四〇）、独立建築の図書館設立に際しては、多額の寄付金とともに、自らが集積した数千冊の和漢書、古今名家の巻物、さらに郷里や東京で交わった名士の書簡や書画など数百点を贈りました。坪谷はこれらを「大多数は明治、大正、昭和の三時代に亘り、朝野の諸名士より私へ来たりし手紙にて、大臣、大将等から政治家、軍人、学者、作家、財界人、書家、詩人俳人、閨秀名家、芸術家等、時代相を窺ひ知るべき有名の人々の筆に成るもの」と解説しています。「今世名家短冊帖」は、このコレクションに含まれる一六〇余点の短冊からなっています。

▲ 表紙

絶壁や海へ降込む蝉時雨
巌谷小波（一八七〇～一九三三）。
児童文学者、俳人。



よしのやまのぼりくだりにうれしきは柳さくらのわたしなりけり
田山花袋（一八七一～一九三〇）。
自然主義作家。代表作に「蒲団」。



母と共に花しほらしの薬草の千振つみし故郷の野よ
堺利彦（一八七一～一九三三）。
社会主義者で著述家、小説家。

これらの人士と、坪谷は多様な関わり方をしたことでしょう。例えば、巌谷小波・田山花袋は博文館の若い社員でしたが、日露戦争が勃発したとき、社では従軍取材が必要になり、花袋は総編集長の坪谷から、「君、戦争に行かんか？」と尋ねられ、当時女性問題で悩んでいた花袋は「行きましょう」と激した調子で答えたといいます（伊藤整『日本文壇史』第八巻）。花袋はこの従軍体験で代表作のひとつ『一兵卒』をものしました。

（近現代部会　大塚　哲）

坪谷善四郎日記と東京加茂郷人会

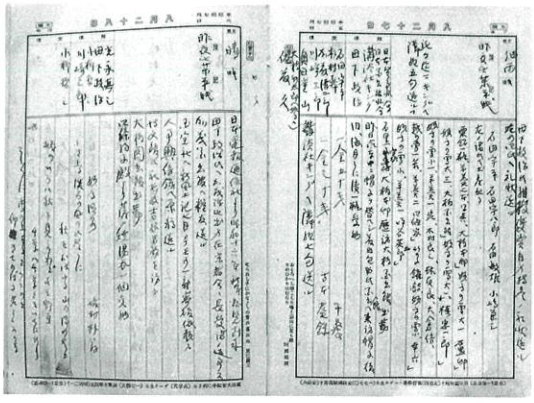
加茂市立図書館には坪谷善四郎の自筆日記五十三冊が保存されています。これは坪谷が博文館に入り、雑誌『太陽』の編集長に抜擢された明治二十八年（一八九五）から、彼が亡くなる二年前の昭和二十二年まで連綿と書き継がれた日記です。

坪谷の日記は、関東大震災の時も、太平洋戦争中も途絶えることなく書き継がれたもので、まさに稀代の文章家の面目躍如がたるものがあります。また出版人としての彼の幅広い交友の記録にもなっています。

なかで、東京加茂郷人会についての記事が注意を惹きます。同会の設立は昭和十四、五年頃から加茂町の政治家・田下政治が上京するたびに話しあわれていました（『加茂町公民館館報』昭和28・3・25）。十六年秋には発起人会が開かれますが、日記によるとこの年八月二十八日、坪谷は田下へ会長受諾の返事をしています。翌年五月十七日、新宿聚楽において約五〇人の出席者を得て発会式があり、初代会長に坪谷が推されました。翌日、彼は四月に衆議院議員に当選したばかりの田下政治に会の様子を報告しています。その後、郷人会は戦災の厳しさのため会員間の連絡も途絶えてしまったといわれています。戦後、東京加茂郷人会が復活したのは昭和二十六年十月のことでした。

（近現代部会　中山之隆）

▲ 足かけ54年、53冊におよぶ「坪谷善四郎日記」



▶ 郷人会会長就任を受諾した日の日記（昭和十六年八月二十八日）

坪谷蘭斎の「巍然帖」

坪谷善四郎の収蔵品の一つで、叔父にあたる小貫の坪谷蘭斎が書いた「巍然帖」と題した漢詩の折本です。

▲「巍然帖」表紙と本文の冒頭部分（加茂市立図書館所蔵）

題箋に「坪谷蘭斎書 魏然帖」とあって、自筆の作で四字×七行＝二十八文字の漢詩（七言絶句）七篇を収載しています。

各詩の表題は、「八幡神祠に謁す」「戸隠山九頭龍窟に謁す」「秋夜鹿声を聞き猿丸の詠歌に擬す」「春日山を行く」「夏日山村に游ぶ」「熊野山に遊んで避暑す」「秋夜友人を思う」と朱で小さく書かれています。

蘭斎は幕末期の人で本名を甚兵衛といい、安政五年（一八五八）の『俳家人銘録全』に「狭口村 酒林甚兵衛」とあるように醸造業を営んでいた素封家です。その傍ら詩や書を能くし、また俳諧も嗜みました。蘭斎は雅号で、また憲渓とも号しました。

七つの絶句のうち狭口村近郊を詠んだものもあり、「八幡神祠に謁す」は、上条・八幡宮の社が加茂川の流れを前に、高い樹木が社殿を護っている様子を詠んでいます。

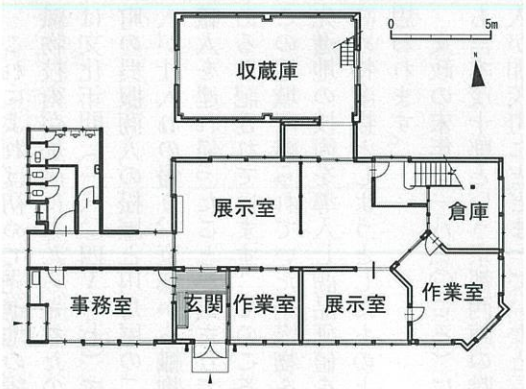
「熊野山に遊んで避暑す」は、宮寄上のお熊野様に登った様子を詠んだ漢詩です。熊野神社には嘉永四年（一八五一）三月奉納の蘭斎書の俳額があって、これには「夏日熊野山に遊ぶ」という表題の、巍然帖に収められているものと同じ作品があります。本作の成立年をみる手掛かりとなります。

甥であった善四郎がこの巍然帖を譲り受け、これを日記などとともに加茂町立図書館に寄贈したものとみられます。（近世部会 関 正平）

民俗資料館（旧加茂町立図書館）

加茂町立図書館は明治三十九年（一九〇六）、坪谷善四郎が図書など多くの私財を寄贈、尽力して開設されましたが、大昌寺や加茂南尋常小学校などを間借りする状態が続き、東京にいた坪谷は、開設後も長く図書や金銭の寄付を続けて町当局へ独立図書館の建設を望みます。この願いが容れられたのは昭和に入ってから、加茂町は敷地を確保し、昭和十五年（一九四〇）三月には町長丘山堅が上京、坪谷と面談して建設の委託先などを話しあいます（「坪谷善四郎日記」）。

図書館はこの年十一月七日に本町において落成し、記念式典には坪谷もかけつけて祝辞を述べ、その晩には料亭で町の歓待を受けました。この建造物は昭和四十二年になると加茂山へ移築され、平成三年（一九九一）まで図書館として利用されます。また、平成六年からは現在みるように民俗資料館となっています。



▲ 民俗資料館の一階平面図（平成21年作成）

現在の建物は木造二階建、寄棟造平入の桟瓦葺です。南側に正面玄関を開き、一、二階を民俗資料の展示や作業室などとして利用しています。また西側には平屋建の事務室があります。

ところで、建物の南東角は四五度で隅切りされ、一・五尺ほど突出た平面をしています（平面図参照）。この変形平面をした作業室は、図書館時代は玄関でした。戦前の古写真をみると、玄関には加茂町の町章と「図書館」の文字を掲げていました。下見板張りを基調とする洋風の外観は、今も建築当時の姿をよく留めています。設計の経過などは不明ですが、坪谷は図書館の普及に熱意を注ぎ、大正七年（一九一八）には推されて日本図書館協会長へも就任しています。町立図書館の意匠に坪谷の意向が反映されていた可能性もありそうです。（文化財部会 西澤哉子）

▶ 本町時代の加茂町立図書館

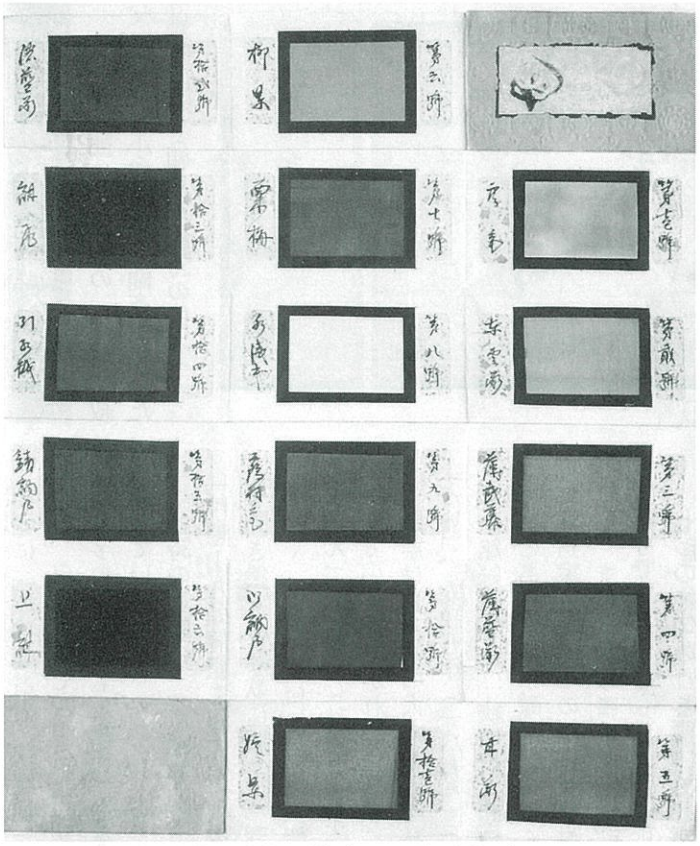
近世加茂の織物業

「加茂縞」のルーツ

加茂市域で織物について書かれている最も古いものは寛政五年（一七九三）の「加茂組明細帳」です。これには「女は耕作の合間に自家用の麻布や木綿を織っている」と記されています。また文化二年（一八〇五）の幕府領出雲崎役所への「御尋書上帳」には、加茂六斎市の取扱商品の中に麻布と木綿があります。このあたりでも地機（じばた）（躙機（いざりばた））で自家用の麻布や木綿を織り、その余りを市で売るようになったのでしょう。やがて亀田や葛塚などの縞織物産地のように高機を導入して生産力を上げ、市への出荷を増やしていったことと思われます。このような近世の木綿織物が、のちの「加茂縞」生産の背景となったのです。

絹織物の導入と挫折

明治三十六年（一九〇三）に刊行された『北越機業史』は近世から明治にかけて県内産地の織物業を概観する唯一の書物です。

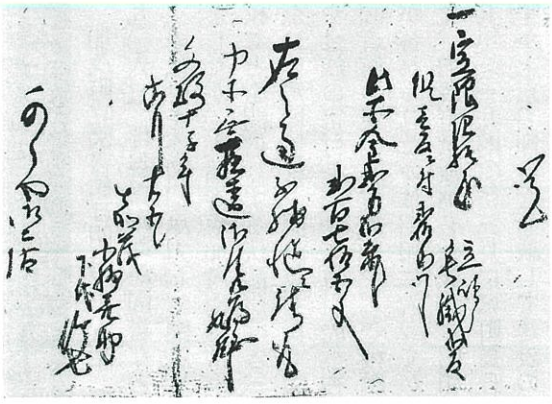


▲　絹織物の染見本帳（幕末～明治時代頃、八幡　服部隆行氏所蔵）

これによれば初めて先進地の絹織物技術が加茂にもたらされたのは文化年間（一八〇四～一七）で、町の呉服商人の松屋と川舟屋の二人が仕入れの帰り、京都から織物職人を連れ帰ったことが始まりであると記されています。そのころこの地域で織られていた絹織物を、先進地の技術を導入し商品価値を高め特産物としようとしたものと思われます。

文政の末年（一八三〇ごろ）にも宮本茂十郎という京都西陣の職人が加茂町にとどまっていたと言う記述もありますが、これもその一環だったのでしょう。

このように文化から文政年間にかけて、町の呉服商人たちは絹織物産地を目指して技術導入の努力をしており、いくらかの絹織物生産もあったのですが、織り手の技術が向上しなかったため特産物化はうまくいかず、やがて松屋・川舟屋ともに廃業してしまいました。



◀　加茂の商人・小柳喜助が加賀屋へあてた毛織縞代金の請取（十日町情報館寄託「蕪木元昭家文書」）

加茂の絹織物

加賀屋（蕪木家）は十日町の有力

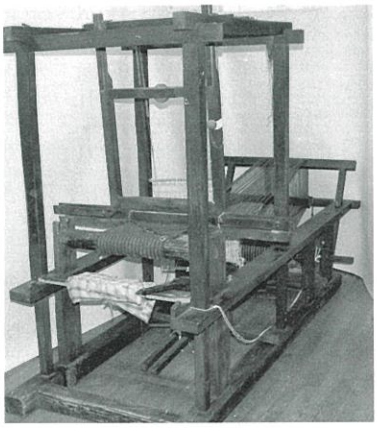
表１　加茂関係織物史料一覧（蕪木元昭家文書より作成）

No.	年　月　日	差　出　人	内　容
1	文政11年（1828）6月25日	小柳喜助下代竹七	毛織縞代金請取
2	天保３年（1832）４月	若狭屋記介	白縮返却
3	天保３年（1832）10月28日	小柳喜助代利七	毛織代金請取
4	天保４年（1833）２月13日	松屋甚五左衛門	帯地・カピタン代金請取
5	天保４年（1833）11月15日	松屋甚五左衛門代兵吉	虫織代金請取
6	天保10年（1839）11月２日	松屋豊三郎	毛織代金請取
7	天保11年（1840）２月２日	松屋豊三郎	袴地代金請取
8	天保11年（1840）４月22日	松屋豊三郎	毛織反代金請取
9	天保12年（1841）閏１月９日	松屋豊三郎	袴地代金請取
10	天保12年（1841）11月30日	若狭屋喜助	毛織代金請取
11	弘化２年（1845）10月17日	松屋豊三郎	毛織代金請求
12	弘化２年（1845）11月27日	松屋豊三郎	毛織・虫糸代金請求
13	弘化３年（1846）１月27日	松屋豊三郎	毛織・虫糸代金請取
14	嘉永４年（1851）11月29日	松屋豊三郎	袴地・縮取引ニ付書状

縮問屋です。同家の史料の中に特産物化を目指しているころの加茂商人との取引を示す一四点の文書があります。これを表1に纏めました。これによれば文政年間から嘉永年間に加茂商人は十日町の加賀屋と盛んに取引をしていたことが分かります。

表2　織物種類別取引数量

年号	織物種類					加茂商人名
	毛織(反)	袴地(疋)	帯地(疋)	カピタン(疋)	(虫糸)(匁)	
文政11年（1828）	2	－	－	－	－	若狭屋
天保3年（1832）	20	－	－	－	－	
天保4年（1833）	17	－	（不詳）	1	－	松屋
天保10年（1839）	10	－	－	－	－	
天保11年（1840）	19	60	－	－	－	
天保12年（1841）	－	（不詳）	－	－	－	
	21	－	－	－	－	若狭屋
弘化2年（1845）	46	－	－	－	350	松屋
嘉永4年（1851）	－	50	－	－	－	



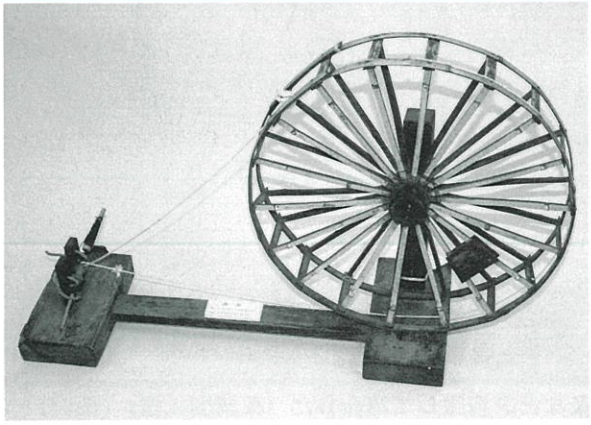
▶ **加茂縞の高機**（たかばた）（民俗資料館所蔵）

表2は年別・織物種類別のものです。加賀屋に販売していた加茂の織物は「毛織」・「袴地」・「帯地」・「カピタン」の四種類です。「袴地」・「帯地」は厚手の絹織物で「カピタン」は光沢のある厚手の絹織物です。「毛織」は「毛虫織」・「虫織」とも呼ぶので、蚕が喰いちぎった繭を真綿にし、それを手で紡いだ糸（これを「虫糸」と呼ぶようです）による「紬」のような織物だろうと思います。つまり、もとは自給用に地機（壁機）で織った厚手で素朴な風合いをもった織物だったのでしょう。「毛織」と一括されたものの中に袴地に最も適した「精好」や縮緬に似た「壁織」などがあります。この頃は京都からの技術導入のあとなので、すでに高機を使って様々な絹織物を織っていたものと思われます。

「毛織」には無地のほか、藍・納戸（鈍い紺色）・生色・黒・蛯茶・鼠、「袴地」には藍縞・萌黄縞などの種類があるので、ともに染めた糸を織り上げる先染織物であったことを示しています。

●加茂町の呉服商人

加賀屋史料の中の加茂町呉服商人は若狭屋（小柳喜助〈記介〉）と松屋（甚五左衛門・豊三郎）の二軒です。文政九年（一八二六）に筆写された「延享子年　町屋敷間改帳」（市川浩一郎文書）を見ると、喜助は文政九年に上町南側に三筆の屋敷地を持っています。この内の二筆はともに間口五間奥行き三一間半、隣接しているので間口は一〇間（約一八メートル）となります。若狭屋は町に大店を張っていた大商人だったのです。



◀ **糸車**（糸繰車）（いとくりぐるま）　繭（まゆ）や綿から糸を紡（つむ）ぎ、それを撚（よ）りあわせるのに用いた（民俗資料館所蔵）

一方、甚五左衛門は上町南側に間口四間四尺五寸（約八メートル）ほどの屋敷地を持っていました。しかし、文政九年にはこの土地の名義は医者森田甫三（千庵）になっていて、甚五左衛門や豊三郎名義の土地はありません。『北越機業史』にある川舟屋についてはまったく見あたりません。川舟屋は文政九年以前に廃業したものと思われます。

松屋と若狭屋は安政年間（一八五四～六〇）刊行の『東講商人鑑』「加茂駅鎮守之図」に名前が見えません。『北越機業史』は松屋と川舟屋の没落を伝えています。また若狭屋は天保十二年（一八四一）を最後としてそれ以降の文書が残っていないので、天保末年頃廃業し、松屋は嘉永末年以降に廃業したのでしょう。

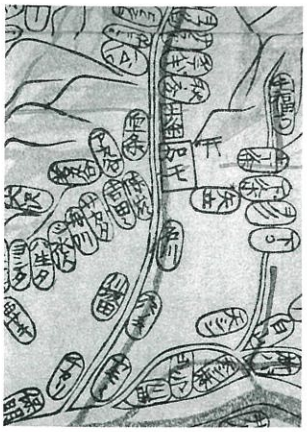
僅か一四点の文書で加茂呉服商人の経営を推し量るのは難しいのですが、いずれも十日町加賀屋からの注文を受けて「毛織」などの絹織物を送っている様子が窺えます。また加賀屋からは「縮」を買い付けています。若狭屋や松屋は加茂町やその周辺で織られた織物を買い付けて、越後内外の織物問屋に「送荷」して販売するとともに、自らも他郷や他国に出向いて仕入たり、仕入れたものを近在に売り捌いていたと思われます。

（新潟大学非常勤講師　杉本耕一）

江戸時代の旅と名所

江戸時代後期になると、庶民の間でも旅が盛んになりました。越後の人々も伊勢参りをはじめとして他国を旅した記録が残っています。一方で、他国の人々が越後を訪れる機会も多くなりました。そして、越後の旅に役立つような地図（写真1）や旅の情報を盛り込んだ案内書も刊行されて、加茂町に関しても紹介されるようになりました。

『東講商人鑑』は、江戸の大城屋良助が発起人となり、全国的な旅行組合として結成された東講（あずまこう）が、安政二年（一八五五）に刊行した本です。幕末期の旅行ガイドブックのような本で、東日本を中心とした東講商人定宿や各地の代表的な商店、名所・旧跡などを挿絵入りで記しています。加茂町についても加茂明神を背景とした町並みなどが大きく示されています（写真2）。



◀ 写真1 「越後国郡図」（部分）
加茂・上条・向上条（むかじょうじょう）・陣嶺（陣ヶ峰）などの地名がみえる

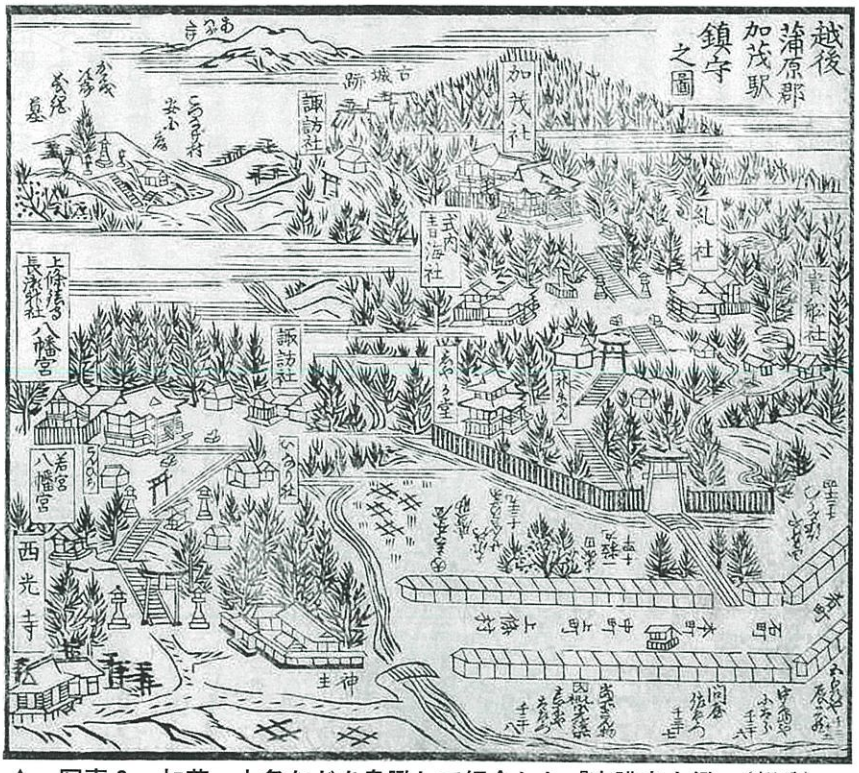
また、嘉永七年（一八五四）に刊行された『越後七郡三仏巡拝記』は、越後国内の観音三三ヶ所、阿弥陀仏一八ヶ所、地蔵尊四八ヶ所および番外観音札所九ヶ所、計一〇八ヶ所への道筋を示した道中案内です。このなかには阿弥陀仏一八ヶ所のひとつに数えられた西光寺（八幡）や、道中に訪れるべき「拝所」として八幡宮（長瀬神社）と加茂皇大神宮（加茂明神）が記されています（写真3）。

次に、実際に加茂町を訪れた人の旅日記をみてみましょう。弘化四年（一八四七）三月二十九日、江戸の商人与八は、加茂町の問屋方に泊まり、「此町家並よろし」と記しています。そして翌日は、加茂明神へ参詣し、「当所町中に有、石段高く三切れに上る、長さ凡壱丁余、鳥居二ヶ所ニ建、御社六間斗、白木造立派、此頃の普請」と記しています（「虎勢道中記」国立歴史民俗博物館蔵）。

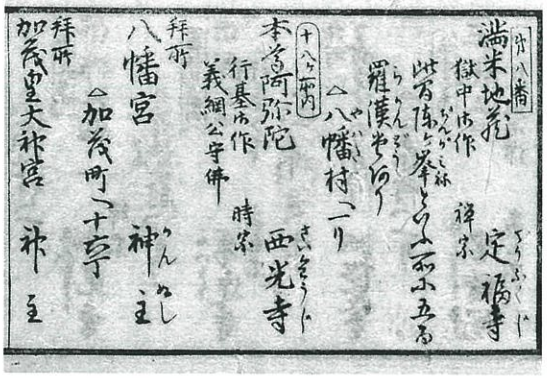
出羽国庄内（山形県）に生まれた幕末の尊攘派の志士である清河八郎は、安政二年（一八五五）に母親を連れて伊勢参りに向かう途中、新潟～新津～田上を経て加茂町を通過しました。その時の様子を、「町家連綿として繁華の地なり。山岸にて町中流れあり。綺麗なる町なり。加茂明神の祠は山上にあり。天保十五年の頃再建せる宮にて、みなみな白木作なり。余程境地のよきところにありて、彫ものなどは殊の外美事なり」（『西遊草』岩波文庫）と記しています。

両者の記録からは、「加茂町は繁華なところで家並がきれい」という印象であったことがうかがえます。そして名所として加茂明神があり、実際に訪れて、その立派さを記録しています。江戸時代に出された旅に関する刊行物や旅日記から当時の加茂町の様子や人々の暮らしの一端がうかがわれ興味深いです。

（新潟県立歴史博物館　渡部浩二）



▲ 写真2 加茂・上条などを鳥瞰して紹介した『東講商人鑑』（部分）



▲ 写真3 『越後七郡三仏巡拝記』（部分）

※本頁の写真3点はいずれも新潟県立歴史博物館所蔵